

5月3日(金・祝) 4日(土・祝) 5日(日・祝)

開場・開演 11:00 a.m. 前売 4,000円 当日 4,600円 3日連続し券 10,000円 (V・F・R・D)

服部緑地野外音楽堂

全席自由 小学生以下無料 雨天決行 荒天中止

2024

春一番

お問い合わせ先 春一番オフィス 070-2022-0070 (14:00~20:00)

主催 文化芸術局 <https://www.harukichikentertainment.sei/>

協力 GREENS 06-6885-1224 (9:00~18:00)
<https://www.greens-corp.co.jp/>

新発売 チケットCS <https://shop.jp.harukichikentertainment2024/>

予約受付期間 7月4日(日) 20:00

ローソンチケット <https://lts.com.harukichikentertainment2024/>

LINE <https://line.com.harukichikentertainment2024/>

イープラス <https://eplus.jp.harukichikentertainment2024/>

観覧不可販売店



今年も5月の3日、4日、5日に開催される大阪の伝説の野外コンサート「春一番」のポスターの絵を描きました。毎回どんな絵にしようか悩むのですが、今年はふと、反戦をテーマに僕なりの絵が描けないかな、と思いました。でも「NO WAR」とか描くのは嫌やしなあ、と迷ってたので、ずっと一緒にポスターを作ってきたグラフィック・デザイナーの日下くんに、反戦みたいななんテーマにしたいねんけど、どうやろ、と相談したら、ええんちゃう、ウクライナの草原に花とかどない？ あのアメリカのフォークシンガー、ピート・シーガーの有名な反戦歌「花はどこへ行った」の原曲はウクライナの民謡らしいし、と教えてくれました。それはええなあ、と思い草原に花を描くことにしました。それでなんの花にしようかな、バラとか、ヒマワリとか、タンポポもあるな、といろいろ調べてたらポピー（ひなげし）がヨーロッパの方では平和のシンボルみたいを書いてあったので、赤いポピーを描くことにしました。僕なりの反戦ポスターです。

〈森英二郎のブログ・MEXOS-HANAXOS/3月23日〉より



京都夷川通のウンベルト（右）、嵯峨のロンドンブックス（左）の店頭でポスターを貼ってもらいました。



表に貼った春一番のポスター、海外からお越しの方たちが通りすがりに写真を撮っていらっしゃる様子をたびたび見かけます。

（ウンベルト 魚住寧子）

永瀬清子の詩の世界 貴方がたの島へ

第25回朗読会

貴方がたの島へ
私は何かを受けとりにゆくのです
いつも人からの愛を受けとつて
精神は着ふくれてゐる貴方がたから
私は何かをうばひにゆくのです
さあ私に何かを下さい、病める人々よ。
私はいたゞきにきました。
この島へ来る人々は
いつも愛の言葉を置いてゆく。
私の愛はごくお粗末、
それでゐて私は食欲に
貴方がたからいたゞきたいのです。
なぜなら私は施しを患むだけではあき足りない。
私に喜びを下さい。
血泥の病氣をいたましく思つたり、
呻きや涙をあはれんだりするだけではまだ足りない。
私は同僚しにゆくだけではいやです。
私に見せて下さい、立派なお友達であるあかしを。
貴方がたは何を私に贈れやうと心配なさる。
肉体の病氣の中にくじけぬ人間、
ありとあらゆる苦しみと涙と膿汁の中の助け合ひ、
昼夜なき痛みや不自由の中の雄々しいいのち
さうしたものを見出して私はふるひ立つのです。
願くば私を喜ばせ勇気を下さい。
それを下さつてこそ貴方がたは私の友達
くじけずひるまず暮す人々を見ることこそ私の喜び。
さあ私に沢山のものを贈つて下さい。

貴方がたの島へ
永瀬清子

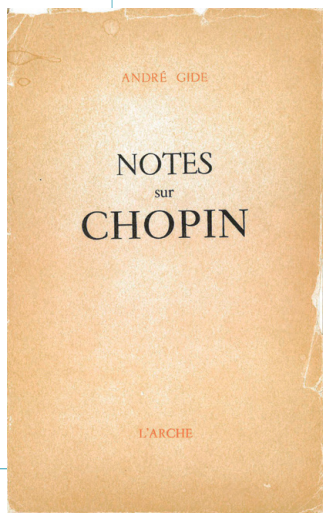
（愛生）一九五二年十月

春一番2024	1	続・ぼくの映画館は家から5分	9
永瀬清子の詩の世界	3	はれのち句もり	10
思い出のクリフォード	6	N'S COLUMN	11
日日読書	6	魚の環世界	12
メモランダム・本のデザイン	7	付録 カメラと歩く	
昭和残照	8	トキドキ漫画	

Originally
April
2024

オリジナリ
ナリ

29



『DUFY』と同じヴァンヴの蚤の市で見つけた本。NOTES sur CHOPIN / ANDRÉ GIDE『シヨパンの52の覚書』アンドレ・ジツド。1948年、パリのアルシユ社刊、印刷はベルギーのブリュッセル。

この本には活版印刷による楽譜がある。活版で組まれた楽譜を見たのはこれが初めてかもしれない。というより、これを見るまでは楽譜の印刷を考えただけはなく、金属活字の職人たちに会ったときに楽譜のことを訊ねなかったことを悔やんだ。譜面の仕上がりは、とても活版で組まれたと思えない。最初はよく見ずに、他の印刷方法とあわせて別刷だろうぐらいに思う体たらく。

活版で楽譜を刷る。グーテンベルク以降、初期からそれは見られる。活字と同様に細かい部品に分けて組み上げる。小さな活字を製作する技術があれば可能だ。それにしても、五線



ジョー・コッカー Joe Cocker
1944-2014

森英二郎 思い出のクリフォード ⑬

ジョー・コッカーを初めて見たのは69年にあった伝説の野外ロックコンサート「ウッドストック・フェスティバル」の記録映画でした。その中で手をブラブラさせながら（エアー・ギター？）思い切りのけぞってシャウトして歌う姿が衝撃的でした。それからしばらくして発売されたジョー・コッカーのアメリカ・ツアーのライブの様態を収めた2枚組LPレコード『マッド・ドックス&イングリッシュメン』が大好きでよく聞いていました。その後ぼくは「ハロー・アゲン・スタジオ」という名前のデザインスタジオをやるのですが、このハロー・アゲンという言葉はこのレコードの4面の最初に針を落とすと、ジョー・コッカーがMCで、ムニヤムニヤ・・・ハローアゲン！と言うてるように聞こえて、ええなあ、と思って付けたのでした。

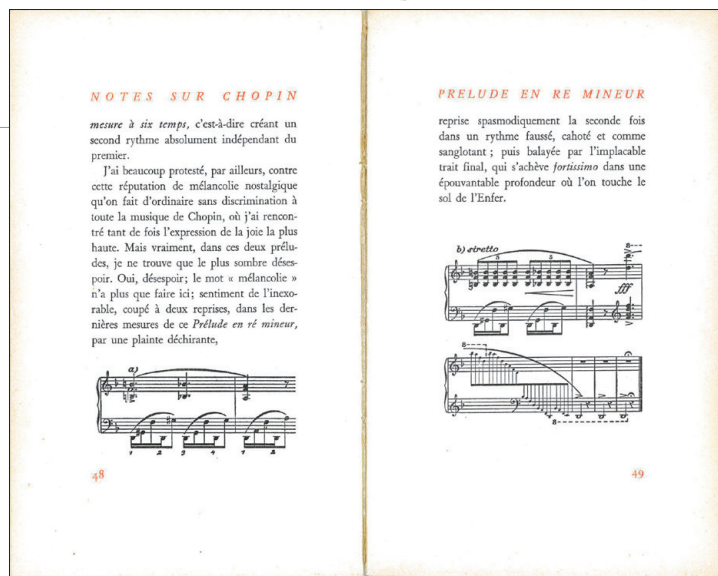
もり・えいじろう 1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎著）、絵本『おとうさんのうまれた うみべのまちへ』など。

メモランダム・本のデザイン 20

『NOTES sur CHOPIN / ANDRÉ GIDE』

その1 日下潤一

下の楽譜（部分）原寸大



本文

譜が切れ目なくつながっているのに驚く。初期の活版印刷の楽譜は線のつながり目が見える。この本の楽譜は見事。拡大率の高い1ページで覗くと、線のつながり目らしきものが発見できる。楽譜の活字組版の実物を見たい。アンドレ・ジツドによるシヨパン論。本文は2色刷り。邦訳（2006年／株式会社シヨパン

ン）がある。（裕福なプロテスタントの家庭に生まれ、敬虔なクリスチャンである母、ジュリエットに厳格に育てられたジツドは、七歳でピアノを始めて、少年期にはシヨパンの直弟子、ヨーゼフ・シフマツハー Joseph Schifmacher（一八二七—一八八八）等に師事しました。）（日本版編訳者中野真帆子のまえがき）

日日読書 大西良貴

26



宮沢章夫
『牛乳の作法』
ちくま文庫／2005年

おおにし・よしとか 1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店 London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。

London Books
616-8366 京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

宮沢章夫のエッセイの絶妙なおかしみには何度笑わされたことか知れない。本書の「お祭りは何時までやっていますか」というエッセイ。祭りの本部への「そちらのお祭りは何時までやっていますか」という問い合わせ。「この問い合わせにどこといって間違いはないが、どうもだめな感じを受けるのはなぜだろう。」映画のシリーズ物について綴る「シリーズの哀しみ」。第一作は名作なのに監督が変わった二作目で凡作になることは多い。その陳腐さを表すのに黒澤明の『生きる』に対して『生きる2』なるタイトルを打ち出す。「じゃあ、小津安二郎はどうか。『秋刀魚の味2』／だめにきまっている。」

どちらにも「だめ」という言葉があるが、氏はだめな感じに面白さを見出す。否定ばかりを意味せず、むしろ豊かな何かでもあるのだ。別のエッセイではこう使われる。「本を読むならだめな喫茶店である。」わかるなあ。変にデザインされた椅子など置かれた洒落たカフェより、どうということのない古ぼけ喫茶のほうが読書に没頭できる。だめの豊かさ。氏の文章にはボクの固定観念を不意打ちで揺るがす快感がある。だから病みつきになるのだ。

60年前の「希望」

関川夏央 昭和残照



55年

読売新聞入社、27歳という異例の本田靖春は、62年、29歳のとき日雇い労働者の街・山谷に潜入した。当時、輸血用血液の主力であった「売血」の実態を探るためである。64年までに調査報道記事72本を書いた本田は大蔵省主計局長に会い、移動献血車導入のための予備費を出すよう求めた。

そうして、もし大蔵省が動かなければ、それを糾弾する記事をさらに72本書くとおどし、採血車22台分の予備費8500万円を計上させた。その結果、65年に20パーセントであった献血率は、66年には50パーセントに急上昇した。新聞に力があり、社会部記者の熱血が政策に影響を与えた時代であった。

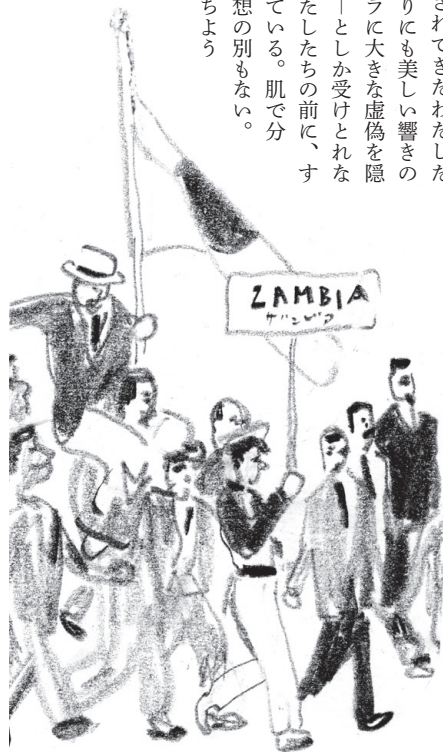
その本田靖春は、64年10月24日には東京五輪開会式の現場にいた。黄昏時の国立競技場トラックへの選手入場は、整然たる開会式の行進と対極、各国渾然一体となった「秩序ある混乱」のうちに行われた。その光景に感動した31歳の本田靖春は原稿なしの電話送稿、「勸進帳」でこんな「雑感」を送った。
〈先頭は、歓声をあげ勢いよくかけこんでき

た若ものたちの一団だった。白い顔も黒い顔も、黄色い顔も……若ものたちはしつかりスクラムを組んで一つになり、喜びのエルを観客とかわしながら、ロイヤル・ボックスの前を「エイ、エイ」とばかりに押し通った〉
〈謹厳そのものの自衛隊員のわきに自分も直立不動、仲間に記念写真をうながしている若ものがある。その記念撮影にカメラを向ける別の若ものたち、いろとりどりの服装が照明の中でないまぜになつて。東も西も、南も北も〉

2週間前の開会式では英国領「北ローデシア」として入場行進した選手たちが、閉会式当日に独立、「ザンビア」の旗を振りながら歩いた。本田のみならず、この時期の日本人は、自国以外のナショナリズムには好意的で、彼らには惜しめない拍手が送られた。

本田の原稿は、このようにつづけられた。
〈世界は「一つ」と聞かされてきたわたしたち。そのことばは、あまりにも美しい響きのゆえに、かえってそのウラに大きな虚偽を隠しているのではないか——としか受けとれなかった。しかし、いまわたしたちの前に、すばらしい光景が展開されている。肌で分ける壁もない。主義、思想の別もない。みんなが、肩を組み、いちよう

に笑い、同じく手を振りつづけて……〉
実は閉会式の劇的展



開には、意外な原因があった。開会式と同じくアルファベット順に各国が入場し、行進する約束だったのだが、開始を待つ間にイスラエルとイラクの選手団の間にいさかいが生じた。それが全体に波及する気配を感じた係員が、順番を無視した「一斉入場」に緊急誘導したのである。
マラソンのアベベ、柔道のヘーシンク、女子体操のチャスラフスカ、世界の広さ、強さ、美しさを日本人に実感させ、そして偶然とはいえ、閉会式では世界の希望の記憶を日本人の心に刻んだ60年前の第1次東京五輪であった。それに引き換え第2次東京五輪は……
37歳で退社してフリーとなつた本田靖春は、糖尿病をはじめ多病で苦しむ晩年を送り、2004年、71歳で亡くなった。病気のうち、肝臓がんは「売血」取材の際に感染したC型肝炎から発症したのである。

続

「ほくの映画館は家から五分」 27

伊野孝行

頃、和田誠信者を謳っていながら映画は初監督作品『麻雀放浪記』と最後に撮った『真夜中まで』しか観ていなかった。

「和田誠 映画の仕事」展の会場で流れていたインタビュービデオ。なんでも一人でこなす万能の天才和田さんが「映画はスタッフの力を借りてみんなで作ることが楽しいんだね。意外にこっちの方が自分に合ってる」と語っていて興味深い。自分の絵は絶対他人にデザインさせない和田さんだが、映画のスケールの中では別の和田さんがいる。

『快盗ルビイ』をYouTubeで視聴。相米慎二のアイドル映画と比べると物足りなさはあるが、これほど品よくセンスよく、かわいイロマンチックコメディはないだろう。今の若い子はこの映画に夢中になると思う。

画面の隅々まで和田さんの美意識。スタッフの力の結晶か。キョンキョン、部屋、衣装、小物……眼に映るものにいちいち感心してつい台詞を聞き逃すほど。

マンシヨンの階下に住む相棒の真田広之は自転車にも乗れない鈍な男。押し込められたアクション俳優の肉体が表す恋のもどかしさ。二人の犯罪計画は失敗ばかりだが悪の存在しない映画なので安心である。驚いたのは二人の住むマンシヨンだ。近所の羽根木公園の前にある、一階が花屋さんのマンシヨンがロケ地じゃないか！



快盗ルビイ 監督 和田誠 1988年

和田誠 映画の仕事

国立映画アーカイブ
2023年12月12日～2024年3月24日

いの・たかゆき 1971年、三重県生まれ。イラストレーター。第44回講談社出版文化賞、第53回高橋五山賞。著書に『画家の肖像』『となりの一休さん』などがある。テレビアニメに「オトナの一休さん」。最新刊は南伸坊さんとの対談本『いい絵だな』。

せきかわ・なつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峡を越えたホームラン』（双葉社/第7回講談社ノンフィクション賞）『坊っちゃん』の時代』（双葉社/谷ロジローと共作・第2回手塚治虫文化賞）、近著に『人間晩年図鑑』シリーズ（岩波書店）。

九段坂

と並行する中坂を靖国神社に向かつて登る途中、和洋九段女子中学校高等学校の先を右へ（つまり飯田橋の方へ）曲がる角に、「硯友社跡」の案内板が立っている。神田三崎町の尾崎紅葉の下宿に出入りする若者たちが結成したのが硯友社だが、何度かの移転を経て、ここに編集室を移した。明治二十一年（一八八八）七月のことで、機関誌「我楽多文庫」を印刷する同益社の向かいの二階家を借りたものらしい。

このゆかりの地に「和洋学園 硯友社文庫」が設けられ、一月からは一般公開も始まった。小さなスペースながら、秋声会周辺の短冊やら軸やら展示は盛りだくさんで、中でも斎藤松洲の《十萬堂病室俯瞰之図》には瞠目した。『紅葉全集』（岩波書店）の第十一巻のカラー口絵に掲出されているとはいえず、印刷にやや鮮明を欠き、さほど印象に残っていないかった。実物は思った以上にサイズもあり（三十五・六×九十六・〇センチ）、何より絵が面白い。タイトル通り、紅葉宅二階の病室を

真俯瞰で描く。左端の布団に半身を起こしているのが紅葉で、看護婦に按摩してもらっているところ。布団の反対側で紙を広げているのは松洲で、まさに《俯瞰之図》そのものを描こうとしていると思しい。俳風風の軽妙な描きぶりのうちに、メタ的な仕掛けを施して心憎い。他に、徳田秋声、小栗風葉、泉斜汀の姿が見え、各人が当日詠んだのだらう俳句を自書する。当日とは明治三十六年一〇月二二日で、描かれているのは紅葉死去の八日前の景ということになる。

はれのち句もり 十九 高山れおな

硯友社文庫の所蔵品のうち、特に肉筆資料の核をなすのは紅葉子孫の小野立子氏の寄贈品と、弟子筋の花笠庵翠葉の旧蔵品で、《俯瞰之図》は後者にあたる。花笠庵の庵号は翠邦が師の石倉翠葉から譲られたもので、この翠葉が紅葉の俳句の弟子らしいのだが、関係性はいまひとつはっきりしない。紅葉選のア・ソロジー『俳諧新潮』には句が見えず、『尾崎紅葉事典』でも完全にノーマーク（索引にさえ名が現れない）。しかし、伝わった品の筋の良さからして、翠葉・翠邦と紅葉の周辺とに繋がりがあつたことは間違いないさそだ。翠葉は明治八年（一八七五）生まれの昭和十三年（一九三八）没。なんと平成八年（一九九六）になってから子息の手で遺句集が編まれてい

る（桜魚）近代文芸社）。句風は嫌味もないかわりに平凡で、これといった句も挙げにくい。綿つみ籠の句などは感覚性に見るべきものがある方だ。

駅寂で農に化す宿飛ぶ燕
若竹の伸びて影ある二階かな
鈴虫の翅を立てつつ鳴きさなる
風車水にうつれる渡舟かな

一句目は、鉄道の開通などで旧来の宿駅が廃れ、宿屋だった家が帰農したというのだらう。自然主義文学風な着眼が時代を感じさせる。二句目は、手前の竹と二階に見える人影を組み合わせた典型的な俳句的遠近法の句。

ある

時期、小劇場関係者にひらがな・カタカナのペンネームが流行った。このうへひでのり（新感線）、マキノノゾミ（MOB）など。

今やワインで喰つてる辰巳琢郎も卒塔婆小町時代、つみつこう名で作・演出した。これ皆、つかこうへいの影響です。つか作品で旗揚げする劇団も多かった。高校演劇も一時つか作品が席卷したと言う。つかの登場はそれほど衝撃的だった。

僕も大阪に来演したつかこうへい事務所『熱海殺人事件』『松ヶ浦ゴドー戒』『ストリッパー物語』を観ている。初めて見る切れ味鋭い黒い笑いに満ちた戯曲に圧倒された。役者たちの迫力も凄まじかった。三浦洋一、平田満、加藤健一、井上奈奈子、そして根岸とし江！

つか事務所全盛期を書いた前作に続く、長谷川康夫『つかこうへい正伝II 1982-1987 知られざる日々』（大和書房）が出た。事務所解散後、演劇休業宣言しテレビドラマや映画、小説の世界に転じたつかを間近で見た長谷川が綴る。テレビ東京『つか版・忠臣

蔵』、NHK『かけおち83』、小説・映画脚本の執筆、在日二世の出自を明らかにした後渡韓して、『ソウル版・熱海』を作り上げる。その舞台裏のつかの奮闘を批判も含め描く。一気に読了した。

中でも沖雅也の件りが興味深い。『忠臣蔵』で起用するも撮影初日に現れず降板、しかしつかは後のテレビ作品で使う。沖といつも一緒にいる日景忠男（沖の戸籍上の父）とも仲良くなる。後につかは「男同士の純なラブストーリー」、「いつも心に太陽を」を書く。つかの俠気と虐げられた者たちへの優しい眼差しが満ちている。

個人的には映画『二代目はクリスチャン』（85）の裏話は笑った。つかは東京都撮影所に乗り込んで、主役の志穂美悦子相手に「口立て」（*後述）で台詞をつける。側に監督の井筒和幸ら映画スタッフ（助監督阪本順治）もがいる。「離れた所から不愉快そうにつかの姿を覗みつける井筒」は、しばらくしてつかと言葉一つ交わす事なく出て行ったそうだ。笑っちゃイケナイか。

「口立て」はつかの代名詞になった。つかが



イラストレーション……森英二郎

西岡琢也 つかこうへい春秋〈上〉

N'S
COLUMN

30

「口立て」はつかの代名詞になった。つかが

一方的に台詞を口走り、役者はそのまま口にする。役者自身の性格、経歴、趣味嗜好等を事前に聞き出し、弱点や恥部を容赦なく暴き責め、役者に生々しい台詞を与え芝居を作っていく。

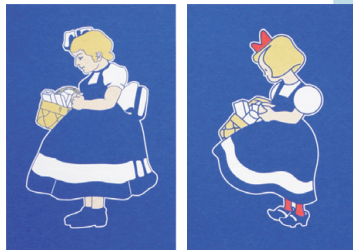
巻末インタビューで、つかの娘で女優（元宝塚歌劇団雪組トップ娘役）愛原実花は、つか没後『熱海』の舞台に立って、つか芝居の台詞は「音としての響きが全て」と分かったと答えている。役者の声や言い回し、たえずまゝいまでつかんだ上で作られた台詞だから、「単なる相づちひとつでも（役者にとって）心地いい、自分も父の口立てを経験したかったと残念がる。

しかし映画版『熱海』（86）のリハーサル室で、つかの口立てにキレて大ベテランの大物俳優（たぶん大澤秀治）が、「その場の思いつきで台詞をどんどん変えられたりしたら、何のための脚本だったということになるだらう！」と怒った。つかは「大丈夫ですから、心配しないで下さい」と答えた。

岸田今日子ために新作戯曲『今日子』を書いて、つかは演劇活動を再開する。その辺りから長谷川は疎遠になったので、つかを書くのはこの本で最後と言う。

2010年、つか逝去。享年62。僕はつかの遺言を知って驚いた。

（つづく）



① 上段左1907年、上段右1942年、
下段左1979年、下段右2003年

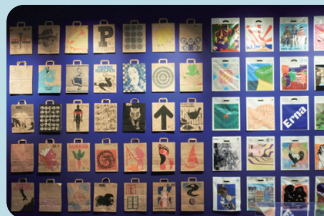
Irma イヤマは長年にわたってデンマークでチェーン展開していたスーパーマーケットでした。前身となった食料品店の創業が1886年。130年以上続いたこととなります。Irmaという店名は、食料品店で当時の主力商品だったマーガリンの頭文字（Johannes Rasmussen's Margarineなので Jrmaですが、Irmaの方が発音しやすかったため、綴りをIrmaに変更）から名付けられたそうです。

Irmaを代表するものでまず思いつくのは、青に白の格子柄のパッケージ（主にコーヒー豆用）です。それから、青い服を着て黄色い籠を腕にかけた少女のマーク。このマークには変遷がありました（①）。過去形なのは、全店舗の閉店が昨年突然発表され、路面店が徐々に姿を消しているからです。コペンハーゲンを訪れるちょっとした楽しみのひとつがなくなり、寂しさを覚えます。

偶然にも、今年最初の買い付け旅でデンマークを訪れた2月、デザインミュージアムでは「Irma-en designhistorie（デザインの歴史）」展がはじまりました（②・③）。わたしが訪れたのは、雨に雪の混じる風の強い日の夕方。閉館時間まで1時間くらいしかない平日でしたが、多くの人で賑わっていました。展示を通して、暮らしに欠かせないスーパーマーケットという場所で日常的に目にする、洗練されたパッケージの商品やユニークな紙袋などが、人々のデザインに対する意識にかなり大きく貢献してきたことを強く感じました。いつかIrmaが復活するように願っています。



② 実店舗で使われていたネオンサインが美術館のエントランスに。



③ 展示風景。様々なアーティストによってデザインされた歴代の紙袋類

魚の環世界 27 魚住寧子

タイトルレタリング……ヨコカク（岡澤慶秀）

うおずみ・やすこ

1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通にUmweltを開く。

ウンベルト Umwelt Textiles & Objects
604-0962 京都市中京区夷川通御幸町
西入達磨町588-1

27号の「日日読書」で大西さんが紹介していた『ムーミン谷の十一月』を読んだ。大西さんも書かれていたように、ネガティブ要素が多い。ムーミン一家、不在の冬。大きな事件は起きないが、小さなトラブルが小さく爆発する。ぎこちない生活が続く。他者と生きるめんどくささと寂しさが一冊に詰まっている。ひとりずつ家を出ていって話は終わる。これをシリーズの最終話にするなんて。作者自身のことをもっと知りたくなり、次はトーベ・ヤンソンの評伝を読む。今号「MY KID'S DIARY」は休載します。（赤波江）

ラジオ「武田砂鉄のプレ金ナイト」は毎週金曜日10時。ラジコの聴き逃しで欠かさず聴く。3月8日のオープニングトークは図書館の話（YouTubeで聴ける）。複本と呼ぶ、図書館の同一書籍複数購入が町の書店を圧迫すると与党議員が言う。日頃、図書館を利用していただければ、それはあり得ないのわかる。知り合いの編集者が作った本を図書館にリクエストすると喜ぶぞ。町の本屋と図書館の新刊は違う。往復2000歩の近所の図書館の新規購入棚でベストセラーなんぞ見たことがない。佐藤文香さんの第三句集『菊は雪』や『明朝体の教室』ならある。世の中にこんな本があるという発見のほうが多い。（日下）

今月のあそびがき

Originally
April
2024

オリジナリ
29

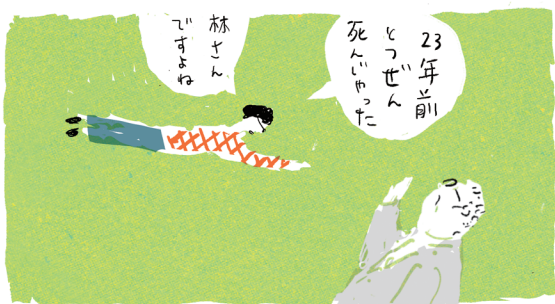
2024年4月15日発行 〈ロゴデザイン〉ヨコカク 〈編集・デザイン〉赤波江春奈・日下潤一 〈印刷・製本〉グラフィックス
〈発行〉ビーグラフィックス ©B GRAPHIX 2024. Printed in Japan 【無断転載禁止】

◆Web = bgraphix.com ◆Twitter & Instagram = @bgx_book_design ◆日下潤一のブログ = www.bgx.jp/blog/
「オリジナリ」はBGXが毎月発行するフリーペーパーです/100部/お問い合わせは akabae@bgx.jp まで



E.Mori

上司の林さん



上司の林さんは
今日も何にも
ニコいませんでした





残る残らないの境界線にある古い建物を取材し、その価値を見直していく連載をできたら面白いのではないかと考えて、まだ一步を踏み出せずにいる。

例えば中野区桃園にある中西利雄アトリエは、高村光太郎が晩年の制作を行い、そこで亡くなった場所。設計は山口文象。保存の動きがあるようだ。そんな建物たちの応援をしていけたら…

先月世田谷の尾崎テオドラ邸の取材があって、保存に至るプロセスの漫画を読んだ。法律や経済の問題、持主や管理会社との交渉、生やさしいことではない。多大な費用をかけて保存したあと、建物への想いや記憶を共有していない若い世代に、その価値を受け渡していくことも重要になりそうだ。

2015年に下井草近辺に越してきて、鴨川つばめの『マカロニほうれん荘』のモデルとなった建物がこのあたりに残っているらしいのを知った。ネットの情報を元に自転車で近所をうろろ



した結果、まさに！という物件にたどり着いた。表面の仕上げは違っているが作品そのままの外観である。今にも窓から「そうじ」が顔を出し、屋根の上に「ひざかたさん」「きんどーさん」が現れても不思議でない気がする。1977-79年に描かれた漫画。築50年はゆうに過ぎているだろう。

私は、この建物がずっと残ってくれたらいいな、中もキレイにして2階の窓辺でほおづえついてみたいなどと願うけれど、現状ただの放置されて朽ちかけた家である。いいかげんもう更地になってしまっただろうと思って様子を見に行き「まだあった…」と胸を撫で下ろすことを繰り返し8年が過ぎた。同じことをしている人が他にもいるだろうか。

- 上「中西利雄アトリエ」1948年築 2024年撮影
- 中「尾崎テオドラ邸」1888年築 2024年撮影
- 下「ほうれん荘」南西から 2015年撮影

カメラと歩く 3 気になる建物 筒口直弘

つづぐち・なおひろ
1971年、練馬区生まれ。『芸術新潮』カメラマン。やはり近所の富士見台に現存する「虫プロ」の伝説的な建物も気になっています。